



大熊町熊川地区で飛び交うホタル  
(震災前に撮影)

夏に採集した子どもたちは、体長約15ミリのホタルを手に取り、ホタルの発光体を不思議そうに見つめ、ホタルの放つ光が創

作した空間に、感嘆の声をあげていた。ホタルの生息地域は非常に限定的で、その生息の条件には、ホタルの幼虫やそのエサが生存できるきれいな川であること、成虫が活動する夜



ホタルの卵が採取された場所

## ホタル舞うふるさと大熊町の復興を願って

福島県大熊町

## 電源地域 復興トピックス

# 災害からの復興を目指す各地の取り組み

このコーナーでは電源地域各地の地域復興に向けた話題を取り上げています。今回は、昨年3月の東日本大震災や9月の台風12号になどによって大きな被害を受けた市町村の復興に向けた取り組みなどを紹介します。

E-mail: furusato@dengen.or.jp



## 台風被害を乗り越え 観光産業の復興を目指す

奈良県十津川村

平成23年9月3日、四国に上陸して日本海に抜けた台風12号は、西日本から北日本にかけての広い範囲に大雨を降らせ、各地に大きな被害を与えた。特に紀伊半島では記録的な降雨量を観測して、甚大な被害をもたらした。奈良県南部の十津川村では一時全村が孤立して、死者・行方不明者12名となる大災害となり、村の主要産業である林業や観光関連産業にも大きな打撃を与えた。

現存の大熊町はホタルが生息できる環境ではない。再びホタルが舞う自然を取り戻すため、ホタルのふるさと大熊町は一日でも早く復興できるように一歩ずつ歩んでいる。

や「大峯奥駈道」の散策ツアーは、地元語り部とともに歩く「世界遺産ウォーク」として、多くの観光客の人気を



(左)「熊野古道 小辺路」の果無集落 (右) 日本一長い路線バス





石巻市渡波地区の『かき小屋』

集めている。

現在、奈良県の近鉄大和八木駅から和歌山県のJR新宮駅まで、十津川村を経由して紀伊半島を縦断するスローなバス旅を企画し、「日本一長い路線バス」の料金を、通常の3割引で運行している。割引の区間指定はあるものの奈良交通の協力もあって実現したもの。

さらに十津川温泉郷の13軒の旅館・ホテルでは特別価格を設定して集客を図っている。奈良県が発行する奈良県南部の「地域復興支援プレミアム宿泊旅行券」を併用すれば観光客にとって、かなりお得な料金といえる。「世界遺産ウォーク」は平成19年過疎地域自立活性化優良事例として話

題を呼んだが、その語り部たちである

「十津川鼓動の会」のメンバーも健在で、定期的にツアーを開催しており、一定の人数が集まれば予約も可能だ。

十津川村は村づくりのテーマとして、住民の自立、地域の自立、経済的な自立を成し遂げるために、「人の再生」、「地域の再生」、「自然の再生」という3つの基本的な考え方向性を示している。

大災害を乗り越え、「心身再生の郷」として村づくりに邁進する十津川村の今後注目が集まっている。

観光に関する問い合わせは十津川村観光協会(☎0746-63-0200、ホームページは<http://totsukawa.info>)へ。

## 三 陸かき小屋街道で地域や漁業者の元気を取り戻す

宮城県石巻市

宮城県石巻市の渡波地区は、東日本大震災の津波で大きな被害を受けたところだ。その海を臨む一角に本年2月、ビニールテントの『かき小屋』が出現。以来、石巻市民をはじめ観光客に人気を集めている。

テントの中にはベンチ椅子と炭火の焼台が並び、客自らが焼いて、石巻で収穫される芳醇な力

キの味を染しむ。料金システムは1皿1人分(8個入り)で1,000円。これに炭代300円とカキナイフ1本100円が追加される。



この小屋は仙台市のインターネット通販会社「アイリンク」が宮城県漁協石巻湾支所と協力して運営する

もの。震災後、養殖を再開したもの

の出荷量は減少し、さらに風評被害などで販売単価が減少しているために三陸沿岸の養殖漁家の収入は激減した。そうした状況の中、漁師や地域の元気を取り戻すべく、代表取締役の齋藤浩昭氏が三陸のカキ業界の復興に向けて企画した。運営のノウハウは、『かき小屋』経営で有名な

福岡市漁協唐泊支所の支援を受けて伝授されたもので、焼台やベンチなどの資材の提供も受けている。「三陸の復興は、単に以前の状態に

戻すというようなものではなく、被災前より遥かに良い状況にするために、新しい業態を起こすことが重要だと思っ

## 東京・有楽町で「福島まごころフェスタ」を開催

4月には仙台港にもオープンした。これに合わせて、仙台から岩手県の宮古市までの三陸沿岸に、線が結ばれていく『三陸かき小屋街道』の実現を目指す。

「今まで、僅かに点在していたカキ小屋が、三陸の復興のシンボルとなるよう、私たちが力を尽くしたい」と齋藤氏は語る。

8月4日(土)と5日(日)の両日、東京・有楽町の東京国際フォーラムで経済産業省主催による「福島まごころフェスタ」が開催された。「見る・知る・味わう、ほんとの福島。ひろがれ!福島まごころプロジェクト」として、「ふくしまからはじめよう」という合言葉のもとに開催されたこのイベントには、福島県内の104の事業者が集結して、県内の特産品や工芸品を首都圏の消費者に直接販売した。

自ら体感した「福島のいま」を伝え、「郡山市民オーケストラ」の演奏や「スパリゾートハワイアンズ・ダンシングチーム」の「フラガール」のフラダンスが、このイベントに花を添えた。

その他「福島まんぷく横丁」と銘打たれた一帯では「ソースカツ丼」や「こおりやまぐリーンカレー」、「浪江焼そば」の屋台が並び、福島県のB級グルメが来場者の人気を集めていた。



オープニングセレモニー